

中学校における特別支援教育の教育実践に関する調査研究

－教員の自己の授業の振り返りとユニバーサルデザインの導入に関する基礎研究－

奥村 俊 幸 (名古屋市立甘軒家小学校)
岩田 吉 生 (愛知教育大学障害児教育講座)

要約 本研究では、中学校の教員のユニバーサルデザインを念頭においた教育実践の現状を把握することを目的として、愛知県常滑市立鬼崎南小学校で教員が活用している「授業のユニバーサルデザインをしてみよう！－子どもが集中して授業に取り組むための30のポイント」を参考にした質問紙調査を行い、中学校における特別支援の推進させる上での課題を検討した。

その結果、すべての教員は、ユニバーサルデザインを念頭に置いた教育実践が根付いているとは言えないことがわかった。中学校の授業を充実させていくためには、個々の教員が、取り組みやすい授業の工夫から始め、取り組みにくい授業の工夫は徐々に増やしていくべきである。また、本調査に用いた調査項目を、教員の教育実践のチェックリストとして活用できるよう検討して必要がある。

キーワード：中学校の特別支援教育，ユニバーサルデザイン，教員の教育実践

1. 問題と目的

平成19年に学校教育法等の一部が改正され、これに伴い、特別支援学級や通級指導教室以外の、通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童生徒の指導、支援を含んだ特別支援教育の推進が求められている。そういった中、近年通常の学級に在籍するLD、ADHD、高機能広汎性発達障害等、いわゆる軽度発達障害のある児童生徒への教育的支援の必要性が叫ばれている。

文部科学省(2012)の学校基本調査によると、小中学校の特別支援教育の対象の児童生徒数は増加傾向にあり、通常の学級にLD、ADHD、高機能自閉症等が疑われる発達障害児が全体の6.5%程度(小学校7.7%、中学校4.0%)在籍する可能性があることがわかった。さらに、小中学校の実態としては、発達障害等のある児童生徒だけでなく、不登校やいじめなど様々な問題を抱えている児童生徒も数多く存在する。そのため、障害のある児童生徒だけでなく、学習面や行動面において様々な困難を示す特別な教育的支援を必要とする児童生徒ら全員に対して、個に応じた指導及び支援を行っていくべきである。つまり、各学校各学級では、教室環境の整備、個の違いを認め合う学級集団作りを念頭に置いた上で、ユニバーサルデザインの学級経営、授業作りを考え、様々なニーズのある子どもの支援を考えていく必要がある。

本研究では、中学校の教員のユニバーサルデザインを念頭においた教育実践の現状を把握することを目的として、愛知県常滑市立鬼崎南小学校で教員が活用している「授業のユニバーサルデザインをしてみよう！－子どもが集中して授業に取り組むための30のポイント」を参考にした質問紙調査を行い、中学校における特別支援の推進させる上での課題を検討する。

2. 方法

2-1. 調査対象と調査方法

(1) 調査対象

愛知県内の中学校3校(S市、T市、K市)の教員計84名を対象とする。

表1に「調査対象者の年代」を示す。

20代が25名、30代が22名、40代が18名、50代が19名であった。

表1. 調査対象者の年代

20代	30代	40代	50代	その他
25	22	18	19	0

(注) 単位：名

表2に「調査対象者の性別」を示す。

男性が47名、女性が31名、無回答が6名であった。

表2. 調査対象者の性別

男性	女性	無回答
47	31	6

(注) 単位：名

表3に「調査対象者の現在の担当学級」を示す。

通常学級担当者が68名、特別支援学級担当者が12名、通級指導教室担当者が2名、無回答が6名であった。また、通常の学級と特別支援学級の両方に複数回答している者が4名であった。

表 3. 調査対象者の現在の担当学級

通常の学級	特別支援学級	通級指導教室	その他
68	12	2	6

(注) 単位: 名

表 4 に「調査対象者の現在の担当学級の学年」を示す。

通常学級の 1 年生担当が 20 名, 2 年生担当が 17 名, 3 年生担当が 21 名, 特別支援学級担当が 12 名, 通級指導教室担当が 2 名, 担当学年を持たない教員のうち国語が 3 名, 数学が 3 名, 社会が 1 名, 理科が 3 名, 英語が 2 名, 保健体育が 3 名, 美術が 4 名, 家庭科が 2 名, 音楽が 3 名であった。また, 通常学級と特別支援学級の両方に複数回答している者が 4 名, 担当学年を持たない教員のうち教科を複数回答している者が 1 名であった。

表 4. 調査対象者の現在の担当学級の学年

	通常の学級	特別支援学級	通級指導教室	その他
中 1	20	12	2	国語 3 数学 3 社会 1 理科 3 英語 2 保体 3 美術 4 家庭 2 音楽 3
中 2	17			
中 3	21			

(注) 単位: 名

表 5 に「調査回答者の特別支援学級・通級指導教室の担当年数」を示す。

担当経験のない者が 61 名, 担当年数が 1 ~ 5 年の者が 16 名, 6 ~ 10 年の者が 4 名, 11 ~ 15 年の者が 1 名, 16 ~ 20 年の者が 1 名, 21 ~ 25 年の者が 1 名, 26 年以上は 0 名であった。

表 5. 調査回答者の特別支援学級・通級指導教室の担当年数 (合計年数)

担当年数	人数 (名)
担当経験なし	61
1 ~ 5 年	16
6 ~ 10 年	4
11 ~ 15 年	1
16 ~ 20 年	1
21 ~ 25 年	1
26 ~ 30 年	0
31 年以上	0

(注) 単位: 名

表 6 に「調査回答者の勤務形態」を示す。

正規教員が 69 名, 常勤講師が 11 名, 非常勤講師が 0 名, 無回答が 4 名であった。

表 6. 調査回答者の勤務形態

正規教員	常勤講師	非常勤講師	無回答
69	11	0	4

(注) 単位: 名

(2) 調査方法 各中学校に質問紙を郵送し回答を求め, 返信用封筒にて返送を依頼した。

2-2. 質問項目

質問項目は, 愛知県常滑市立鬼崎南小学校で教員が活用している「授業のユニバーサルデザインをしてみよう! - 子どもが集中して授業に取り組むための 30 のポイント」を参考にし「教師の話し方」, 「授業の進め方」, 「学習環境の整備」, 「教材・教具の工夫」, 「課題の設定」の 5 領域・30 項目に関して, 教員が日頃の教育活動の中で, ①「教育実践の現状」の調査 (3 件法「3. 常に実施している, 2. ときどき実施している, 1. ほとんど実施していない」) を行う他, 同質問項目に対する, ②「教育実践のしやすさ (難易度)」の調査 (3 件法「1. 常に実施できる, 2. ときどき実施できる, 3. 実施することが難しい」) を行う。

2-3. 結果の分析

調査結果を統計的に処理し分析した上で, 中学校教員のユニバーサルデザインを念頭に置いた, ①教育実践の現状と, ②教育実践の難易度とその課題について検討する。

3. 結果と考察

(1) 中学校教員のユニバーサルデザインを目指した教育実践の現状

表 7 に「中学校のユニバーサルデザインを目指した教育実践の現状の順位」を示す。

全体の実践度の平均は 2.12 であり, 最も実践度の高かった「(3) 指示をする前には, 子供の活動を止めさせて, 聞く準備 (姿勢) をさせている。」(実践度 2.67) と, 最も実践度の低かった「(18) 選択できる状況作りをしている。」(実践度 1.50) の実践度の差は 1.17 であった。

調査項目 30 項目のうち, 実践度の高かった項目 (2.50 以上) は, 「(3) 指示をする前には, 子供の活動を止めさせて, 聞く準備 (姿勢) をさせている。」だけであった。

また, 実践度の低かった項目 (1.50 ~ 1.99) は, 以下の 8 項目であった。

- ・(17) まとめ(振り返り)の活動を工夫している。(実践度1.96)
- ・(19)協同学習,教え合い,話し合いの方法をきちんと説明し理解させた上で)友達との協同学習を行っている。教え合う場面・話し合う場面を設定している。(実践度1.96)
- ・(30)全体への目標と共に,気になる子の個別の目標と具体的な手だてを,具体的に明らかにしている。(実践度1.89)
- ・(5)禁止・否定ではなく,前向きで肯定的な表現で話している。「～してはだめ」ではなく,具体的にどうしたらいいか,望ましいモデルを伝えている。(実践度1.86)
- ・(27)個々の実態に応じた教材・課題(課題内容・課題の量)を用意する。(実践度1.86)
- ・(18)選択できる状況作りをしている。(1.50)

実践度の比較的高い項目(2.20以上)は,教員が児童たちに対して意識的に注意喚起を促し,教員の授業での指示や説明を理解させるための教員の話し方や授業の進め方の工夫に関する取り組みが多かった(項目番号2,3,4,6,7,9,11,12,13,14)。また,学習環境の整備に関する取り組み(項目番号20)や,学級の雰囲気づくり等に関する項目も実践度が高いという結果であった(項目番号23,26,29)。

反対に,実践度の低かった項目(実践度1.99以下)は,個々に対する対応や,教材の準備,話し合いの時間を設けること等,事前に準備を要する内容や,授業の流れに関する内容の項目であった(項目番号17,18,19,27,30)。また,視覚的支援の実践度も低かった(28)。さらに,学級全体にはではなく,個に対する対応に関する項目も実践度が低かった(項目番号18,27,30)。

(2) 中学校教員のユニバーサルデザインを目指した教育実践のしやすさ(難易度)

表8に「中学校教員のユニバーサルデザインを目指した教育実践のしやすさの順位」の結果を示す。

全体の難易度の平均は1.81であり,最も難易度の高かった項目,つまり最も実践しにくいとされた項目は「(18)選択できる状況作りをしている。」(難易度2.27)であり,最も難易度が低く最も実践しやすいとされた項目は「(4)大事なことを言う前には,予告をしている。」(難易度1.46)の難易度の差は0.81であった。

調査項目30項目のうち難易度が高く実践しにくい項目(2.00以上)は,以下の2項目であった。

- ・(30)全体への目標と共に,気になる子の個別の目標と具体的な手だてを,具体的に明らかにしている。(難易度2.14)
- また,難易度が低く実践しやすい項目(1.69以下)

は,以下の7項目であった。

- ・(4)大事なことを言う前には,予告をしている。(難易度1.46)
- ・(3)指示をする前には,子どもの活動を止めさせて,聞く準備(姿勢)をさせている。(難易度1.50)
- ・(9)語調に変化をつけている。(声の大きさ,抑揚,スピードの変化)(難易度1.50)
- ・(20)机の上の必要のない物は,机の中に片づける指示を出している。机の横の必要のない物は,後ろのロッカーに片づける指示を出している。(難易度1.57)
- ・(14)一時一作業にしている。(難易度1.64)
- ・(6)一方的に話さず,子どもの回答や反応を待つ間を作っている。(難易度1.64)
- ・(12)活動の終わりと終わりの行動を示している。(何を,どこまでするのか,終わったなら何をするのか)(難易度1.68)

難易度が高く実践しにくい項目は,実践度の低い項目にも挙げられていた,個別に対応する内容や,事前に準備を要する項目が実践しにくいとされている傾向にあった(項目番号18,27,30)。また,視覚的な支援に関する項目も実践と同様に順位が低く,難易度が高く実践しにくいという結果であった(項目番号28)。

反対に難易度が低く実践しやすい項目は,教員の声の大きさや話の長さ等,話し方に関する物が多くあった(項目番号3,4,6,9)。また,学習環境を整えるための取り組みに関する項目も見られた(項目番号20)。

(3) 中学校教員のユニバーサルデザインを目指した教育実践の現状と実践のしやすさ(難易度)についての考察

全体的に実践度の高い項目は難易度が低く実践しやすくなり,実践度の低い項目は難易度が高く実践しにくくなるという結果になった。

実践度が高く,実践しやすい項目は,声の大きさや,話の長さ等,教員の話し方等,教員が授業においてその場で対応する指導内容に関する項目が多くみられた。

反対に,実践度が低く,実践しにくい項目は,学級全体に対する働きかけや,教員自身の振る舞いではなく生徒へ個々に対応する項目や,授業に対して事前に準備や計画を要する項目,授業の流れに直接関係のある項目が多くみられた。また,視覚的な支援に関する項目も実践度が低く,実践しにくいとされている傾向にあった。

これらのことから,中学校の教員は言葉がけや話し方の工夫でより良い授業,学級経営を行っていかうとしていることが分かった。しかし,子どもたちの成長に頼り過ぎ,教員自らの心がけをおろそかにしている傾向が伺える。小学生と比べ,中学生の教員の話す内

表7. 中学校教員のユニバーサルデザインを目指した教育実践の現状の順位

順位	項目	実践度
1	(3) 指示をする前には、子どもの活動を止めさせて、聞く準備（姿勢）をさせている。	2.67
2	(2) 指示は短く、一つの話で一つの内容を伝えている。	2.46
3	(9) 語調に変化をつけている。（声の大きさ、抑揚、スピードの変化）	2.43
	(20) 机の上の必要のない物は、机の中に片づける指示を出している。机の横の必要のない物は、後ろのロッカーに片づける指示を出している。	2.43
5	(8) 配慮が必要な子への指示は、全体指示の前に注意喚起（予告、呼名、体をふれる等）をしたり、その後個別に声をかけたりしている。	2.39
	(29) 動きのある活動を取り入れている。	2.39
7	(4) 大事なことを言う前には、予告をしている。	2.36
	(6) 一方的に話さず、子どもの回答や反応を待つ間を作っている。	2.36
	(7) 褒め、認める言葉がけ、わかりやすい具体的な評価を工夫している。	2.36
	(12) 活動の終わりと終わりの行動を示している。（何を、どこまでするのか、終わったら何をするのか）	2.36
	(13) 単調な授業にならないように、いろいろな活動を組み合わせ、授業展開を工夫している。	2.36
	(11) 導入を工夫し、本時の課題をわかりやすく伝えている。	2.32
13	(15) 机間支援の工夫をしている。個別的な支援とともに、個別的な称賛を与える機会を作っている。徘徊にならないように、明確に目的を持って回っている。	2.29
14	(1) 授業での説明や指示は、抽象語を少なく具体的な言葉で、わかりやすく話している。	2.25
	(21) 子どもの視界に入る部分は、できるだけすっきりさせている。教室正面の掲示を簡素化している。	2.25
16	(14) 一時一作業にしている。	2.21
	(16) 教科ごとの授業の流れを一定にしたり、活動の流れをわかりやすくしている。	2.21
	(23) 授業でのルールを徹底をしている。ルールを目に見える形で示している。	2.21
	(26) 認め合い、支え合い、共にのびる学級の雰囲気作りをしている。（教師や友達も人的環境）	2.21
20	(10) 授業の最初に、本時の授業の流れを示している。（言葉、板書、カード等）	2.18
	(22) 座席の位置を最適し、子どもの姿勢に注意を与えている。（いすや机の高さ）	2.18
	(24) 黒板の使い方を工夫している。	2.18
23	(25) 静かな時間を作っている。	2.04
24	(28) 視覚的な提示方法を工夫している。	2.00
25	(17) まとめ（振り返り）の活動を工夫している。	1.96
	(19)（協同学習、教え合い、話し合いの方法をきちんと説明し理解させた上で）友達との協同学習を行っている。教え合う場面・話し合う場面を設定している。	1.96
27	(30) 全体への目標と共に、気になる子の個別の目標と具体的な手だてを、具体的に明らかにしている。	1.89
28	(5) 禁止・否定ではなく、前向きで肯定的な表現で話している。「～してはだめ」ではなく、具体的にどうしたらいいか、望ましいモデルを伝えている。	1.86
	(27) 個々の実態に応じた教材・課題（課題内容・課題の量）を用意する。	1.86
30	(18) 選択できる状況作りをしている。	1.50

表8. 中学校教員のユニバーサルデザインを目指した教育実践の難易度の順位

順位	項目	難易度
1	(18) 選択できる状況作りをしている。	2.27
2	(30) 全体への目標と共に、気になる子の個別の目標と具体的な手だてを、具体的に明らかにしている。	2.14
3	(17) まとめ（振り返り）の活動を工夫している。	1.96
4	(19)（協同学習、教え合い、話し合いの方法をきちんと説明し理解させた上で）友達との協同学習を行っている。教え合う場面・話し合う場面を設定している。	1.96
5	(27) 個々の実態に応じた教材・課題（課題内容・課題の量）を用意する。	1.93
6	(28) 視覚的な提示方法を工夫している。	1.89
7	(13) 単調な授業にならないように、いろいろな活動を組み合わせ、授業展開を工夫している。	1.86
8	(26) 認め合い、支え合い、共にのびる学級の雰囲気作りをしている。（教師や友達も人的環境）	1.86
9	(16) 教科ごとの授業の流れを一定にしたり、活動の流れをわかりやすくしている。	1.82
10	(24) 黒板の使い方を工夫している。	1.82
11	(15) 机間支援の工夫をしている。個別的な支援とともに、個別的な称賛を与える機会を作っている。徘徊にならないように、明確に目的を持って回っている。	1.79
12	(21) 子どもの視界に入る部分は、できるだけすっきりさせている。教室正面の掲示を簡素化している。	1.79
13	(25) 静かな時間を作っている。	1.79
14	(5) 禁止・否定ではなく、前向きで肯定的な表現で話している。「～してはだめ」ではなく、具体的にどうしたらいいか、望ましいモデルを伝えている。	1.75
15	(10) 授業の最初に、本時の授業の流れを示している。（言葉、板書、カード等）	1.75
16	(11) 導入を工夫し、本時の課題をわかりやすく伝えている。	1.75
17	(22) 座席の位置を最適し、子どもの姿勢に注意を与えている。（いすや机の高さ）	1.75
18	(1) 授業での説明や指示は、抽象語を少なく具体的な言葉で、わかりやすく話している。	1.74
19	(2) 指示は短く、一つの話で一つの内容を伝えている。	1.74
20	(23) 授業でのルールを徹底をしている。ルールを目に見える形で示している。	1.73
21	(29) 動きのある活動を取り入れている。	1.73
22	(7) 褒め、認める言葉がけ、わかりやすい具体的な評価を工夫している。	1.73
23	(8) 配慮が必要な子への指示は、全体指示の前に注意喚起（予告、呼名、体をふれる等）をしたり、その後個別に声をかけたりしている。	1.73
24	(12) 活動の終わりとは終わりの行動を示している。（何を、どこまでするのか、終わったら何をするのか）	1.68
25	(6) 一方的に話さず、子どもの回答や反応を待つ間を作っている。	1.64
26	(14) 一時一作業にしている。	1.64
27	(20) 机の上の必要のない物は、机の中に片づける指示を出している。机の横の必要のない物は、後ろのロッカーに片づける指示を出している。	1.57
28	(3) 指示をする前には、子どもの活動を止めさせて、聞く準備（姿勢）をさせている。	1.50
29	(9) 語調に変化をつけている。（声の大きさ、抑揚、スピードの変化）	1.50
30	(4) 大事なことを言う前には、予告をしている。	1.46

容や授業内容に対する理解力等は成長しているが、配慮が十分ではない授業では、すべての生徒が理解できるわけではない。中学校の教員は生徒一人一人に対する配慮が欠けているといえる。全体に対しては、小学校に比べ、多少難解、複雑な指示や作業を要求しても問題はないが、その分、配慮の必要な生徒に対しては、よりいっそう気を配って支援していかなければならない。また、小学校と同じように、教員が授業の準備に使える時間が少ないためか、事前に準備の必要な項目は総じて実践度が低く、難易度が高く実践しにくいという傾向がある。こういった問題を解決していかなければ授業にユニバーサルデザインを取り入れていくことはできない。

4. 今後の課題

今回の調査結果において、教育実践の現況で点数の高く・難易度が低い項目は、大勢の教員が実践しており、実践することが比較的容易なものであった。そのため、新任の教員をはじめとして、教員すべてがユニバーサルデザインを意識して児童生徒を指導する上で取り組むべき項目であると考えられる。

教育実践の現況で点数の低く・難易度が高い項目は、大勢の教員が実践しておらず、実践することが比較的困難なものである。そのため、教員が授業を進める上で基本的な指導・支援を行った上で、さらにユニバーサルデザインを意識した授業作りを充実させていく上で取り組んでいく項目であると考えられる。

中学校の授業を充実させていくためには、個々の教員が、取り組みやすい授業の工夫から始め、取り組みにくい授業の工夫は徐々に増やしていくことが必要であろう。

本調査に用いた調査項目を、教員の教育実践のチェックリストとして活用できるよう検討していきたい。今回の質問紙は、小学校で使用されていたものであるため、今後は、中学校版の項目を作成していく必要がある。

引用・参考文献

- ・愛知県教育委員会（2011）特別支援教育体制推進事業モデル事業，特別支援教育サポート校研究委嘱（平成20～22年度）
- ・文部科学省 「特別支援教育資料」 2011, 2012
- ・文部科学省 「全国特別支援教育体制整備状況調査」 2012
- ・文部科学省 「特別支援教育の推進のための学校教育法等の一部改正について」 2007